特集〈あまい〉

農の現場から『あまい』を考える

古谷　久美

我が家は、千葉で先祖代々稲作を続けている農家です。推定五百年前後受け継がれてきた田んぼには、昔から牛の糞や稲わらを完熟させた堆肥が入れられてきたようです。そして、そこで獲れるお米は、産地直送でお届けしている消費者の方々から「甘みがあっておいしい」と高い評価を頂いております。また、近隣の田んぼで作られているお米と比べても、客観的に測定される食味は高いようです。

同じような田んぼで同じように育ち、見た目も同じようだけれど、農作物は工業製品のように均一な仕上がりではなく、大変個性的なものといえ

ます。作物は正直ということでしょうか。

米作りでは種子の選定から始まり、それを育てていく環境のすべてが相互に絡み合い、トータル的においしいお米を実らせてくれます。

そして、その中でも大きなウェイトを占めるのが土作りではないかと私達は考えています。作物をおいしくするのは、土中の微生物といわれています。良質な堆肥を入れると、微生物はそこに含まれる有機質を食べ、ミネラル等の微量要素を放出します。この微量要素が稲の根を元気にし、お米がおいしくなる栄養素を根に与えると考えられています。作物が根を張り生長の為の養分を吸い上げる土は、手間隙かけて耕した分、作物の実りを豊かなものにしてくれます。我が家では、この大いなる土の力に感謝の思いを込めて「先祖代々の田んぼの底力」と呼んでいます。

我が家では野菜は作っていませんが、同じように土作りにこだわる畑作仲間の作る野菜はやはり、一味違います。獲れたての新鮮な野菜の甘み、健康な野菜本来の濃厚な味が広がります。キャベツもトマトも人参も、スーパーで買うものと同じ野菜とは思えないほどの違いに驚きます。

スーパーの店頭に出るまでの時間を見越した早めの収穫、長い輸送時間、それをカバーするための添加物やコストの問題など、単純な素人考えからすると、物凄く無駄なことをしているように思われます。すぐそばの畑には旬の野菜がごろごろあるのに、我が家の近くのスーパーにさえも、遥か遠い産地の野菜がずらりと並んでいます。

今や商業主義の時流の中、本来は大量生産、大量流通に向かない食べ物までが工業製品並みに市場に出回り、コスト削減を余儀なくされ、ひいては環境面や健康面で様々な弊害が生まれてきてい

るように思われます。そんな中、ここにきて「ちょっと待った！」「何かおかしいぞ！」と声があがるようになりました。

最近『地産地消』（＝地元で獲れた物を地元で食べる）という言葉をよく耳にします。昔から我が国に伝わる『身土不二』（＝人の命と健康は人が住む土と共にある）に通じる言葉です。全国の行政や農協、第三セクターが運営する直売所や農産加工場、学校給食の現場で地場農産物の取扱量が着実に増えてきているようです。私達の命と健康を守る食について少しずつ、新しいうねりが広がろうとしているのを感じます。

都会暮らしの方々にとっては、住む土地の農作物は無理な話ですが、なるべくなら気候、風土の似た近県のものを、それが無理ならせめて国産のものを選んで頂きたい、家族の為においしくて安全という食本来の大前提を持つ農産物を選んで頂きたい。信頼できる産直ネットでも、個人の産直でも、作り手の顔が見え、こだわりの伝わる農産物を、可能な限り選んで頂きたいと願います。

と、ここまでつらつらと思いを巡らしていたところ、田んぼ仕事を終えた夫が、日に焼けた顔と泥だらけの作業着で戻って来ました。

私が「ねぇ～、農作物を育てている立場から『あまい』というテーマで何かある？」と声をかけると、ざぶざぶと手を洗いながらの第一声が「米や野菜があまいだのまずいだの、暢気なこと言ってる場合じゃないぞ。あまいのは消費者だ」

と手厳しい言葉。

現在四十三才の夫は、この地域の農家の中では最年少です。主力は五十代、六十代で、どの家も次代の担い手はなく、今ある田んぼや畑が消えていくのは時間の問題です。日本の農業が紛れもなく、刻一刻と衰退していくのを夫は日々、肌で感じています。我が国の食糧自給率は、四〇パーセントそこそこと先進国の中でも最低の割合です。そのことに、もっと危機意識を持って欲しいと夫は言います。

まだ、記憶に新しい平成五年の大凶作の年、我が国はたくさんの外米を輸入しました。しかし、お金さえあればいつでも食糧が集められるのでしょうか。天災、人災、急激な人口増加、政治上の問題など、世界がこの先、いつどうなっていくのか、何一つ保証はないわけです。ご飯が食べられなければパンや麺類があるじゃないなんて、あまいこと言うなよ、と夫。小麦だって手に入らなくなるかも知れません。

何でも、もの作りが一番大変、ものがあってこそ、それを仕入れて能書き付けて売ることができる。農業に対して、「大変ですね」「頑張って下さい」と、うわべだけ言ってあまい認識でいると、本当に取り返しのつかないことになるぞというわけです。

農業が第一次産業と言われる所以は、人間の命と健康を支える根っこの産業だからだと私達は考えています。この土台がぐらついて、何の二次、三次かという自負を私達は持っています。

今のこの時流の中、できることから実践の輪を広げ、日本の農業を守っていくうねりを確かなものにしていきたい、『あまい』というテーマから発信する千葉の一農家の切実な思いです。

（千葉・セイダイ農場）